

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」(コロサイ1:6)

## 【巻頭言】

### 「八潮ホープフルチャーチの理念」

八潮ホープフルチャーチ 牧師 久島 真人

教会が「何を、どのようにするのか」ということを決定づけるためには「何故、教会がこれらのことをしているのか?」という問いに対する回答をしなければなりません。その回答は、以下の4つのことでしょう。

①教会は神の栄光を表すべきであるため(1コリント10:31など)。②教会は福音を知り、生き、伝えるべきであるため(エペソ2:1-10など)。③教会は最も大切な命令を理解し、守るべきであるため(マタイ22:37-39など)。④教会は大宣教命令を実践すべきであるため(マタイ28:19)。

一例として、上記の教会の存在目的を踏まえ、八潮ホープフルチャーチがどのような理念を持ち、また具体的な働きを行っているのか紹介させていただきたいと思えます。

八潮ホープフルチャーチの理念は、<ローマ15:13>に照らし合わされて作成されています。この箇所では、希望の神様(源泉)から「信仰」というパイプを通して「喜びと平安」を与えられることが書かれています。そして、それだけでなく、その喜びと平安を受けた私たちが、聖霊の力によって「希望」にあふれ、その希望が周りの方々に流れる様子が描かれています。

私たちは、ただ偶然に存在しているのではなく、神ご自身から与えられた使命を成し遂げるため、この時代、この場所に遣わされています。私たち八潮ホープフルチャーチのメンバー一人一人は、この<ローマ15:13>の御言葉のようなキリスト者として生きることを目指します。そして、愛、喜び、平安などの「人格の実」を徐々に結び、「礼拝」「交わり」「訓練」「奉仕」「伝道」に積極的に携わるようになり、「人間を捕る漁師」「収穫のための働き手」として、他の人々を真の希望であるイエス様のもとへと導くよう成長していくことを私たちの使命としています。この目標に向かって生きていくために、この使命を果たすために、私たち八潮ホープフルチャーチは大きく分けて5つの働きを教会として行なっています。

①説教(あらゆる判断基準を知り、理解し、生きるために)

教会はキリストのからだであり、神によって建てられるものです。それゆえ教会は神が与えた設計図である聖書の言葉に沿って形成されなければなりません。教会が行うあらゆる働きも、個人の生涯も、その正誤を判断するのは聖書の真理なのです。その真理を説き明かす説教は何よりも重要なことだと信じます。

②聖書の弟子訓練(一人一人のキリスト者がロールモデルとなる)

イエス様が弟子たちを訓練することを通して模範を示し、『弟子とする』という命令を残したがゆえに、私たちは弟子訓練の働きに従事しなければなりません。この弟子訓練は、主が教えたことすべてを守るように人々に教えることです。パウロはコリントやピリピの教会のキリスト者たちに「私に倣う者になってください」と繰り返し命じています。このようにキリスト者は成熟したキリスト者の模範にならって、主に忠実な者としての生き方を学んでいく必要があると信じます。(例:カウンセリング入門、基礎、リーダー育成の学び、各世代における交わり、祈禱会など)

③聖書の教会形成(使命と秩序を知り、理解し、生きるために)

聖書が教える教会とは建築物のことを指すのではなく、神によって贖われた者たちのことを指しています。この教会はキリストをかしらとして存在し、聖書の教えに沿って組織され、与えられている働きを全うする必要

があると信じます。(例:牧師、執事、教会員とは何か、戒規など)

④礼拝(使命を実際に生きるために)

キリスト者はキリストの救いによって罪との葛藤の中にありながらも、神をほめたたえることを心から望み、また神の栄光を表しながら生きることが出来る者へと変えられました。礼拝の目的は神の素晴らしさをほめたたえることです。それゆえ、礼拝の内容はキリスト者を対象とし、どうしたら神のすばらしさをほめたたえることができるのかを考えなければならないと信じます。(例:礼拝形式やプログラム等についてなど)

⑤伝道(倣うだけの者ではなく、倣わせる者となるために)

伝道には様々な方法がありますが、何よりも大切なことは、聖書が教える福音を語ることです。もちろん、その人の痛みを担う必要がある場合もあります。しかし、痛みを担うとは、その人の痛みを理解することに努め、寄り添い、手当てをすることだけではありません。それだけにとどまらず勇気を持って御言葉の真理を語り、その人が真の神に対して悔い改めをすることができるように促すことでもあると信じます。

私は、この八潮ホープフルチャーチのあるべき姿、ゴールをしっかりと見据え、そこに向かってこれら5つの働きを通して、愛する信徒お一人お一人を導き、養い、世話をしていきたいと考えています。

## 【JMRレポート】

今回のJMRレポートは、2022年2月7日に行われた「第7回東日本大震災国際神学シンポジウム」(主講師:英国オックスフォード大学 アリスター・マクグラス教授、クリスチャン新聞 2/20、27号参照)での講演の中から、日本側講師3氏の講演のレジュメ、及び1月24日東京基督教大学国際宣教センター「2021年度冬学期教会教職特別セミナー」として行われた講演のダイジェスト版を併せて掲載いたします(全てオンラインで開催)。なお『中外日報』のオンライン情報からも、記事を転載させていただきます。

### 第7回東日本大震災国際神学シンポジウム

「いかにしてもう一度立ち上がるか—これからの100年を見据えて—」

「試練と摂理——創世記第22章を通して」

青山学院大学宗教主任・准教授:森島 豊

1. はじめに

- 震災の時何を見たのか
- 永井隆博士
- 創世記第22章「アブラハムのイサク献供物語」

2. 創世記第22章

- 試練=神の手の中で、神がよく分からなくなる出来事が起こっている
- 試練のない人生はない。しかし、神のいない人生もない。その神を発見できるかどうか、わたしたちの立ち上がれるかどうかの分岐点になる。

3. 試練の中で何をしたのか

- 「焼き尽くす献げ物の子羊はきっと神が備えてくださる」
- Providence(摂理)=先に見る
- 私どもは神が見えない。けれども、神は私どものことを見えているはず!

4. 目を凝らす

- 「アブラハムが目を凝らすと、遠くのその場所が見えた」
- その場所とは → 「あそこへ行って、礼拝をして」
- 礼拝する場所に目がけて歩む
- アブラハムは神の御心を尋ね求めながら、見えない神を見るようにして、神を礼拝する場所に向かって歩いていく。その場所で、アブラハムは、今まで見えなかったものが見えた

## 5. 「主の山に備えあり」

□ 「彼は見た。見られていることを。主の山で」

□ 「アブラハムは見た。自分が神に見られていることを。神を礼拝する場所で」。

神の愛は、あの津波に負けたのではない。私どもが見えなくても、神は必ず見ておられる。そのお方が今わたしたちと共に生きておられる。この事実が人びとを深く慰め、また立ち上がらせる。

そのことを知っているのは、教会です。

## 『“死の陰の谷”を歩む教会』

神戸改革派神学校校長：吉田 隆

はじめに

・マクグラス講演を受けて

### I. 壊れた「理想世界」と、「現実世界」のキリスト

・“死の陰の谷”を歩む中で考えたこと

・被災地に降りて来られた方

・被災地で受難節(レント)を歩む

### II. 降りて来られた方と、降りていく生き方\*1

・降りて来られた方

「ご自分には何の悲しみの原因も無かった方が、私のために悲しんでくださった…。と言うのも、主は受肉の外見ではなく、現実を負われたからである。それ故、主が嘆きを味わい、悲しみを閉め出すのではなく乗り越えることが必要なのであった」\*2

・被災者の所へ出向き、被災者と共にある教会

・下(現場)に降りていくことで生まれる一致(マタイ 18:4、ローマ 12:16)

### III. 死の場所から生まれる命

・津波後の倒木からの新芽

・「木には希望がある」(ヨブ 14:7) ⇒ 死ぬはずの体をも(ローマ8:11)

・死を見つめる者たちこそが“復活”の証人に(マタイ 27:61。ヨハネ 19:41 参照)

おわりに ~ “死の陰の谷”を歩む教会として

・長い受難節としてのコロナ禍

・現実世界を超える信仰(キリストの王国)に生きた古代教会にならう

・“死の陰の谷”を共に歩む方と、喜びをもって

\*1: 横川和夫『降りていく生き方—「べてるの家」が歩む、もうひとつの道』(2003年)参照。

なお、これとは別に『降りてゆく生き方』という映画が2010年に公開されている。

\*2: カルヴァン『共観福音書註解』26:37(アンブロシウスからの引用)。

なお、悲しむことの大切さの模範を主イエスが示されたことについては、『綱要』3:8:9(十字架を負うことについて)「われわれの師であり、また主である御方は、ただ御言葉のみによってではなく、御自身の範例によって…、他の人々のわざわいのためにも、歎息し、落涙されたからである」を参照。

## 「カトリック教会における東北の大震災後の取り組みと、この2年間の感染症対策」

カトリック東京大司教区 大司教 菊地功

### I: 東日本大震災

日本のカトリック教会は、2011年3月16日にカトリック仙台教区(青森、岩手、宮城、福島)本部にサポートセンターを開設し、教会の人道援助団体であるカリタスジャパンが側面支援をする形で、国内外からの支援をとりまとめて被災地での活動を開始した。

その後沿岸部に8カ所のボランティアベースを設け、全国からのボランティアや教会関係者を受け入れた。

当初の予定通り、10年目となる2021年3月31日をもって、全国的な活動は終了し、ボランティアベースは、地元の状況に応じて NPO などとして存続したり、閉鎖となった。また第三者による総括の評価を行い、その評価書を公表している。

(<https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2021/07/report20210630.pdf>)

今後の災害発生に備えて、司教協議会内部組織として災害対応部門を設置し、担当司教を任命。同時に、災害対応マニュアルを作成した。

今後も地元である仙台教区が中心となって、「カリタスみちのく」の名称で関連する旧ボランティアベースによるネットワークを形成し、地元に着した支援活動を継続している。

## 2: 新型コロナウイルス感染症対策

教会としての統一した取り組みは、それぞれの地域の事情も異なるために行っていない。

東京教区（東京都と千葉県）では、対策で先行した香港教区のアドバイスを受け、カトリック医師会東京支部の専門家と協議の上、2020年2月末頃から、教会におけるさまざまな感染対策を講じ、さらにはミサの公開中止へと踏み込んだ。できる限り聖堂の閉鎖は避け、教区統一の対策を制定しているが、教会のそれぞれの事情に応じて、対応の細部では異なる。

東京教区では、専門家のアドバイスを受けながら、感染対策のガイドラインを制定し、ホームページなどを通じて、その時点での対応を告知する。

霊的な支援のために、オンラインでのミサの配信を東京カテドラルから開始し、他の教会にもその動きは自主的に広がって、現在も継続中。さらにメッセージのオンライン配信も、例えば毎週土曜日夕の「週刊大司教」など、現在も継続中。

その後、全国の教区で、それぞれ独自の対応を行ったが、統一した基準の必要を痛感したため、司教協議会では東京教区のガイドラインを参考に全国的なガイドラインを作成。

(<https://www.cbcj.catholic.jp/2020/11/09/21446/>)

教会に集まることが難しくなったことで、教会共同体の意味を見直す機会となっている。

教皇フランシスコは2023年に世界代表司教会議を招集し、そのテーマを教会のシノドス性としている。世界中の教区で、昨年10月からこのテーマに関するともに学び分かち合うプロセスが始まっている。まさしく今、教会のあり方が問われている。

### 東京基督教大学国際宣教センター「2021年度冬学期教会教職特別セミナー」

#### 「ニューノーマル時代の教会を考える」(ダイジェスト)

日本福音自由教会協議会八潮ホープフルチャーチ 牧師 久島 真人

本日の講演のタイトルは、「ニューノーマル時代の教会を考える」ですが、これは半年前に提出したもので、今や余り使われなくなっているのが現状かと思えます。このタイトルからは、「インターネットと教会とのつながりや関り」といったことを考えられる方が多いかもしれませんが、今日はそうしたことを考える前にまず考えておくべきことについて一緒に考えたいと思います。

そこで、まず皆さんに質問をします。「あなたの属している教会は、どのような教会か？ また、あなたは其中でどのような存在ですか？」このことを頭の片隅において話を進めたいと思います。

私が、免許更新時の講習会で、目的地までの道を自分でどのように決めるかを考える「自主経路設定」という授業がありました。その時教官が授業のまとめとして、「車を走らせる時、目的地を明確に設定して走らせれば、渋滞に巻き込まれようと道に迷うとも、必ず最後は目的地にたどり着く。しかし、目的地を設定しないで運転すると、時には楽しいかもしれないが、目的地には永遠にたどり着きません。皆さん、人生も同じです」という話をされました。

最近、目的や目標を決め、計画を立て、それを実行し行動に移せば、それによって自己実現していくことができるということが言われています。自己承認欲求を満たしたいという欲求が強い時代もありましたが、現代においては、自己承認欲求だけではなく、自己実現として、いかに個人が貢献できるか、どのようにしてそれ

を実現するかを考える時代が変わってきていると言えます。他人に認められるだけでなく、自分が自分に満足するかが大きなポイントになってきています。

では、「自己実現」とは何でしょうか。「自己実現」とは、目的であり、自分の能力、強み、可能性の発揮を通して自分らしく生きると同時に、社会貢献することであると言えます。アブラハム・マズローの定義によれば、「偽りのない自分の姿で、好きなことをして、それが社会貢献につながる状態、それが自己実現である」と言われています。

これまであった定義や常識、それらの捉え直しをしようとするのが「ニューノーマル時代」です。一つの事柄に対して問いを持ちながら、その答えを模索します。中・高校生の「何故校則を守らなければならないのか」等の疑問に象徴的に表れているように、若者たちは、もっともらしい答えがあったとしても、それを押し付けないで欲しいと願います。それは、性の問題や環境、国、お金、衣食住等々どの分野においても同じことが言えます。理屈よりはリアルな感覚を大切にすると、若者は頑固になりやすく、それは、自分がどのように感じるか、受け取るかは、自分が社会貢献するために、自己実現するために大事だと考えているからなのです。

そのような流れの中で、私たちはコロナ禍に突入しました。コロナ禍においてキリスト教会は、「教会とは何か」「礼拝とは」「聖礼典とは」等本質的なことを考えさせられ、確認を迫られています。

そうした時大切なのは、「あなたの教会はどのような目的や目標、ゴールを持ち、そのためにどのような働きをしている教会なのか。またあなたは、その中でどのような存在なのか」を問うことであると言えます。

私は、次のような意見を聞くことがよくあります。①教会に自分のスキルや能力を発揮する場が余りない、②教会や牧師に自分のアイデアを話しても受け取ってもらえない、話が通じない、③変な所であてにされて重荷に感じたり、自分の思いとは違う働きや、若いからと言って得意でない分野の働きを強制的にさせられ、酷使されている等等。

また、教会や牧師に、信徒リーダーとして求められる役割を果たそうと頑張ってきたが、疲れてしまった。そこから離れて、環境を変えれば良いと友人から言われたりもするが、教会内での人間関係や立場、責任があるのでどうしたらよいかわからない。

そのような時に訪れてきたのがコロナ禍による教会強制離脱。そこで、気づかされる。教会で自己実現することはできない、自分の賜物を活かすことはできない、キリストの体の一部ですと聞かされていても、自分を活かすことはそもそも教会ではできないと気づかされる。自分の能力、強み、可能性を発揮して神の国を拓ける働きをしたい、貢献したいと思っても、教会の中でさえそれは不可能なのだと気づかされる。そして、教会につまづきを感じ、少し教会と距離を置きたいという人もいます。

「あなたの属している教会は、どのような目的や目標、ゴールを持ち、そのためにどのような働きをしている教会なのか。またあなたは、その中でどのような存在か」という問いに、どれだけの人が答えられるでしょうか。また、そのような話を自分を牧会し、養い、整え、世話し、導いてくれる牧師から、聞いたことがどれ位あるでしょうか。そもそも、どこに向かって行くか分からないような場所で、私たちは時間や労力をかけて働きをなしたり、それが神に仕え、神に喜ばれる奉仕の働きだと思っていたのでしょうか。それは、＜I コリント 9:26＞に言われている目標のはっきりしない走り方をし、空を打つような拳闘だったのではなかったのでしょうか。

あなたが疲れを覚え、酷使されていると感じるのには原因や理由があるのです。あなたがキリスト者として、クリスチャン・ワーカーとして、神に喜ばれる形で用いられていくためには、教会をどのように理解し、自分の教会とどう関わるかがとても大切であり、それは、あなたのアイデンティティーに関することなのです。

教会抜きにイエスを愛し、神と関わることはできません。＜使徒の働き 9 章＞からもわかるように、イエスと教会を分けることはできません。あなたにとって、教会はどのような存在であるかをもう一度考え、確認することが必要です。

＜エゼキエル 34:2-10＞に、牧者への警告が語られています。羊飼いである牧者は、権威ある者として群れの中に置かれています。その群れを不当に治めることも、羊の犠牲の上で自分たちが肥えることも、また、羊の群れをバラバラにすることも可能です。そうならないように、羊を養い、世話をし、導くために牧者たちは、聖書的な牧会理念を持つ必要があるのです。教会の存在目的、あるべき姿、ゴール、それは時代がどのようなものでも変わりません。もし、牧会理念と言うものがはっきりしていなければ、曖昧な教会形成になってしまい、その結果、やらなければならない働きが何なのか、それは何のためにやっているのか、これは果たして意味のあることなのか、ということが曖昧になり、信徒に疲れや不安を与えることとなります。そして、羊の群れはいつの間にか、多様性と言う言葉の中で、バラバラとなってしまふことになりかねません。



では、「牧会理念」とは何でしょうか。あなたは、あなたの教会の牧師や役員からそれを聞いたことはあるでしょうか。教会とは、イエスがご自身で建てると言われた唯一の組織です。その教会のあるべき姿、ゴールをしっかりと捉え、そこへどのようにして信徒を導き、養い、世話をするか、牧師にはそのことをしっかりと考え、牧会の働きに努めることが求められます。この牧会理念は、牧師や役員だけでなく教会に属しているクリスチャン全員に関わる問題です。あなたが、キリスト者として、神に豊かに、喜ばれる形で用いられていくためには、教会をどのように理解し、自分の教会とどう関わるかがとても大切だからです。自分が属する教会がどのような理念を持っているのかは大事なポイントになります。

一般的に、理念とは「ある物事についてのこうあるべきだという根本の考え方」を言います。従って、「牧会理念」とは、牧会における根本的な考え方ということになります。どの教会でも礼拝や何らかの働きをなしているのであれば、何故、その働きをするのか、何故、そのような方法とするのかという理念があるはずであり、理念のない教会は存在しないと言っていいと思います。今何故、対面礼拝を中止するのか、また、何故、それを再開するのか、そうしたことは理念に基づいて判断されるべきことです。

このように、「聖書的な牧会理念」とは、牧会におけるあらゆる選択や決断を導く、譲ることのできない聖書的原則を指し示すものであり、聖書は時代や文化によっては変わらない教会のあるべき姿を示しています。従って、教会のリーダーたちは、新約時代の教会の働きの学びを通して、また、教会の働きに対する聖書の教えや示唆される方法を注意深く学ぶことによって、牧会理念を構築する必要があります。そのようにして導き出された理念は、何故と言う疑問に関することだけではなく、どの様にしてという疑問に対するヒントも与えてくれるものです。具体的には、聖書の神観、聖書観、教会観、人間観等をもとに、各教団には「信仰告白」が存在しますので、その信仰告白に基づいて牧会理念が導き出され、それをもとに教会形成がなされるので、牧師だけでなく信徒も、受洗前後の学び等を通してその理解が求められることになります。

牧会理念を持つことのメリットとしては、①教会全体の共通理解が得られ、多様性の中で方向性の一致を生み出し、働きと計画の一貫性をもつことができる、②働きの優先順位を明確化することができる、③各働きと教会全体との関連性を明瞭にすることができる、④群れ全体としての目標を正しく示し、そこからズレないことができる等があげられます。

牧会者には、教会のあるべき姿に向かって、その先頭に立って羊を導き、養う務めが与えられているわけですが、では、あなたは教会をどのように理解し、教会のあるべき姿、教会の柱となるものは何だと考えられているでしょうか。

第一に、神のすばらしさを讃えること、すなわち礼拝が教会の中心(詩 19:1)です。自分が満たされるためではなく、私がどれだけ神を褒め讃える礼拝を献げているかが問われます。礼拝のプログラムの中で、奉仕の中で、賛美の中で、神のすばらしさを讃えることを群れ全体に促すものになっているか、また、礼拝者として一人ひとりの日々の生活の生き方の中に反映され、実を結んでいるかが問われます。

第二として、教会は、信徒の徳を高めるため、すなわち、信徒がキリストに似た者とされ、キリストにあって成熟した者として立たせるために存在します(コロサイ 1:28-29)。パウロが目指したのは、自己実現や社会貢献ではなく、一人ひとりが聖書によって考え、歩めるように導くこと。そのために、労苦しキリストの力によって奮闘していると言っています。

第三として、教会は、未信者の救いのために存在します(マタイ 28:18-20)。

教会は、これらの3つの柱によって成り立っています。その柱を大切にする時に、それらを実現するために、私たちがなすべき働きは何かを考える必要があります。この牧会理念が教会の中で共有されて、この目的のために働きをしますと言うことを、一人ひとりが言えるようにしていく必要があるのです。

これから牧会者として遣わされて行く人がいると思いますが、自己実現というキーワードの中で進んでいる社会ではありますが、私たちは社会貢献ではなく、神の国の貢献をしていきたいと思うのです。そして、大牧会者であるイエス・キリストから委ねられたキリスト者一人ひとりを養い、世話をし、整え、導くように、また、一人ひとりのキリスト者にとって牧会者は、賜物として与えられていることを覚え、お互いに愛し合い、一致してキリストの体を建て上げていきたいと思います。

以上



「持続可能な社会『変革』を促す宗教の役割」

2022年1月7日 社説

地球社会が未来に向け発展を続けるには、先進国であれ途上国であれ一人一人の命が尊重され、広がる貧富の格差、気候変動や生物多様性の喪失などの困難な問題に向き合っていかなければならない。「誰一人取り残さない」を掲げるSDGs(持続可能な開発目標)は、その処方箋ともいえるが、実はちょうど50年前の1972年にも地球の資源や環境の有限性から人類の危機を警告したローマ・クラブの有名な『成長の限界』が発表され、反響を呼んだ。

それから半世紀後の結果を見れば、世界は警告に聞く耳を持たなかったと言わざるを得ない。

仏教では「非常の言(ことば)は、常人の耳に入らず」という。人は目先の利益や利便性に執着して煩惱に明け暮れていると、真実を説く仏の教えが届かない。災害心理学などでいう「正常性バイアス」を連想する。災害などの不都合なことは過小評価や無視しがちな人間の習性を意味する言葉である。いずれもその先には、不幸な結末が待ち受けている。

SDGsもその理想に反し、新型コロナ禍の渦中で先進国と途上国のワクチン接種率に極端な開きが生じ、貧富の格差も一段と拡大した。はるかな目標に到達するまで険しい難路が控えていそうだ。

SDGsの理念は要するに、人類が欲望を抑えなければ地球は破滅する、に尽きる。ここでも仏教の「少欲知足」が浮かぶ。今の時代、自然の懷に抱かれて生きとし生けるものとの共生を良しとする日本古来の思想は見直されていい。仏教界でSDGsに取り組む機運の高まりには理由があるといえよう。ただ、国連で採択されたSDGsを含む「2030アジェンダ」(略称)のキーワードは「変革」だ。世に災いを招く理不尽を正すには変革する意思と行動が要る。例えば災害を考えてみる。

17日で27年になる阪神・淡路大震災は近代都市の直下で起きた初の災害だった。以後頻発する大災害を見ても、科学技術が発達するほど態様は複雑化し、規模も人災的側面も大きくなり、被害は弱者に偏る。そして人災の要素が強まるほど被災者は心に深い苦痛を刻む。その不条理さに踏み込まないと持続可能な社会は望めない。

安全の対義語は利潤、というジョークがあるが、人災は突き詰めれば人間の強欲が根源にあるといえる。もとよりそれは災害に限ることではなく、社会を変革に導くには人の心にライフスタイルを変えるほど強い動機づけが求められる。今の世でその力を期待できるのは、宗教以外にあるだろうか。

「分断超克のための共同作業 ネット世界だけでは限界」

時事評論 2021年12月10日

大阪大教授 稲場 圭信

現代の日本社会に「分断」はあるのか。あるとすればどのような意味で、どのような形で私たちの生きる社会に存在し、影響を与えているのか。11月、インターネットの影響力を研究する社会学者、社会心理学者が『ネット社会と民主主義～「分断」問題を調査データから検証する』(辻大介編、有斐閣)を上梓した。

インターネットが民主主義の分断を促進するように作用しているのか。同書では、2019年に実施した全国調査と17年から19年に実施したウェブ調査の結果を分析し、検証している。調査データはコロナ禍前のものであるが、まさに「分断」という言葉がメディアでも頻出した時期である。そこには、ネット決定論を裏付けるものはないが、政治的な化学反応を促進する影響力はあった。

編者の辻は、対立する意見に接触し比較考量する機会が失われることを問題視する。そして、社会的弱者の声が政治に反映されにくい一方で強者の声が反映されやすいことが分断を生じさせる可能性を指摘する。

分断を生じさせない、また、ある分断を解消するにはどうしたらよいか。簡単な処方箋はない。しかし、異質な他者への共感という感情が重要なことは言うまでもない。どうしたらその感情、心が育つのか。様々な研究がなされてきた。人間は、成長・加齢とともに他者への思いやりが自然に発達していくようプログラムされて

いるのではなく、社会の中で人と人とのつながりや様々な体験を通して学習していく、すなわち、他者の存在が重要だというのが社会科学の知見だ。

社会科学分野では第2次世界大戦後、どうして人は残忍なことをするのか、なぜあのような悲惨な戦争を人類は起こしたのか、そうした人間の負の部分の研究が進められた。それは当然といえば当然で、第2次大戦における多くの命の犠牲という現実を目の前に、このようなことを繰り返してはいけないと原因究明の研究があった。人間の負の部分の研究が進められてきたが、残念ながらこの世の中から戦争は消えていない。

一方、ハーバード大学の社会学者ピティリム・ソローキンは1949年、The Harvard Research Center in Creative Altruism（創造的利他主義研究センター）を開設する。10年間、リリー財団の寄付で研究が進められた。人間の負の部分ばかりを見るのではなく、善なる面、思いやりや利他的な行動を研究すべきだという信念があった。今から70年も前のことだ。

2011年にはアメリカ社会学会に Altruism, Morality, and Social Solidarity Section（利他主義、道徳性、社会的連帯セクション）が創設された。多様な考え方や異なる社会階層や人種の存在が重要だが、それだけでは分断の超克につながらない。多様な意見、異なる価値観に出会い、共同作業をする場が必要との知見がある。それは、インターネットの世界だけでは無理であろう。

altruism（利他主義）の造語の生みの親であり、社会学の祖と称されるオギュースト・コントは、晩年に、キリスト教ではなく、兄弟愛と人類愛を説く人類教を提唱した。分断社会の超克に、今、私たちはどこに道を見出すであろうか。

## 教団・教派、宣教団体の機関紙・ニュースから

### カトリック中央協議会：日本司教団関連 お知らせ（2021/11/08）

#### 「シノドスの歩み 始まる

#### ～世界代表司教会議 第16回通常総会に向けて／教区フェーズの締切延長

##### 教区フェーズの締切延長

教皇庁シノドス事務局の書簡（2021年10月28日付）により、各国司教協議会の回答を教皇庁に送る締切（教区フェーズ）が2022年4月末から、同年8月15日に延長されました。

これに合わせて、日本の各教区から司教協議会への意見書の提出期限は、2022年2月末から、2022年6月4日に変更となります。（以下の「教区フェーズ」参照）（2021年11月5日記）

##### シノドスの歩み始まる

2021年10月10日、バチカン聖ペトロ大聖堂で、「世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会」の開幕ミサが、教皇フランシスコの司式によって行われました。（「世界代表司教会議・第16回通常総会：教皇による開会ミサ」[バチカンニュース、2021年10月10日]）

今回のシノドスのテーマは、「ともに歩む [=シノドス的] 教会のため——交わり、参加、そして宣教」です。教会にゆだねられた使命に従って福音をのべ伝える教会の刷新のため、それぞれの現場で、聖職者、修道者、そして信徒がどのような経験をし、困難に遭遇し、どのように霊に導かれているかという声を、世界中から集めていきます。

この「声を集める」ための基本的な質問は以下の通りです。

シノドス的教会は、福音を告げながら、「ともに旅をする」のです。この「ともに旅をする」ということは、今日、みなさんの教会の中で、どのような形で起こっているのでしょうか。わたしたちが「ともに旅をする」中で成長するために、霊は、わたしたちがどのような段階を踏むよう招いているのでしょうか（「準備文書」26項）。



## シノダリティ(シノドス性)とは？

シノドス的な教会とは、耳を傾ける教会、信徒、司祭・助祭、修道者、司教、そして教皇が、それぞれ相互に耳を傾け合い、また全員が真理の霊に耳を傾け、霊がわたしたちに告げていることを理解するもの(教皇フランシスコ「世界代表司教会議設立 50 周年記念式典における演説(2015年)」より)。

「シノダリティ」が表わす主な原則は「準備文書」2 項に描かれています。

- ・霊の呼びかけを思い起こす。
- ・すべての人の声を聞く、参加型の教会プロセスを生きる。
- ・カリスマの多様性を認識する。
- ・福音宣教のための参加型の方法を見つける。
- ・反福音的な動きを見極める。
- ・社会の癒しや和解のために信頼できる教会となる。
- ・キリスト教諸派、他の宗教、市民団体との連携を強める。
- ・教会内のシノドス的な動きを促進する。

## 行程表

最終的に、2年後となる、2023年10月のローマでの総会に向け、世界中で準備を進めるという、長いプロセスを歩むこととなります。

教皇による開幕ミサに続いて、各教区でも、10月17日に開幕ミサが開かれ、来年、2022年2月に向けて、教区での意見聴取が進められます。

その後、～2022年4月～(2022年8月15日に延長)＝日本司教団のまとめ(教区フェーズ)、～2023年3月＝アジアでのまとめ(大陸フェーズ)、2023年10月＝バチカンでの総会(普遍教会フェーズ)、と進みます。

## 教区フェーズ

各教区での意見聴取の進め方は、「準備文書」31 項に、その際に参考となる質問票は以下にあります(質問票 A、または、質問票 B)。

この教区レベルの意見聴取では、これら10の領域の質問に対する「回答」を求めているのではありません。このフェーズの目的は、参加者全員が各現場の現状を振り返り、新たな道を模索することです。質問票はそのための「道しるべ」としてご利用ください。さまざまな団体からの意見が望まれています。とくに、「司祭評議会」と、小教区・教区の「司牧評議会」の貢献が期待されています。

意見聴取のやり方については、各教区に任されています。それぞれの担当者(教区連絡担当者／チーム＝「手引書」付録A参照)が準備します。

- 1.さまざまな形で、意見を聞く集まりが開かれる(「手引書」付録B参照)。
- 2.最終的に、各教区内での諸意見を集約するための会合(教区シノドス前会議＝「手引書」付録C参照)が開かれる。
- 3.教区のまとめが作成される(「手引書」付録D参照)。
- 4.教区のまとめは、2022年2月28日 6月4日までに、日本司教団に送られる。

## シノドスのための祈り

Adsumus Sancte Spiritus (聖霊よ、わたしたちはあなたの前に立っています)

聖霊よ、わたしたちはあなたの前に立ち、あなたのみ名によって集います。

わたしたちのもとに来て、とどまり、一人ひとりの心にお住まいください。

わたしたちに進むべき道を教え、どのように歩めばよいか示してください

弱く、罪深いわたしたちが、一致を乱さないよう支えてください。

無知によって誤った道に引き込まれず、偏見に惑わされないよう導いてください

あなたのうちに一致を見いだすことができますように。

わたしたちが永遠のいのちへの旅を続け、真理と正義の道を迷わずに歩むことができますように。

このすべてを、いっどこにおいても働いておられるあなたに願います。

御父と御子の交わりの中で、世々としえに。

アーメン。



「2020年度教勢報告(B表)財政報告(C表)から見えてくるコロナ禍の影響」

2021年11月17日

日本基督教団事務局総務部 道家 紀一

### 1. 現住陪餐会員について

2020年度は7万5087名である。2019年度の7万7288名から2000名が減少した。コロナ禍以前からの減少傾向は続いている。

しかし、コロナ禍によって、大きな影響を受けたとは考え難い。中世ヨーロッパで疫病が流行り、多くの死者が出て、人口が激減したという状況ではないので、教会員の数も大幅に減少することはなかった、といえようが、減少傾向に歯止めはかかっていない。

### 2. 礼拝出席数

現住陪餐会員の数値に比べて、激減しているのは、礼拝出席者数である。2020年度は3万6973名、2019年度の4万8084名に比べて明らかに減少している。この原因は明らかにコロナ禍による。会堂に集まって礼拝すること自体を控えねばならなかった状況があり、また、礼拝をささげることが、事実上困難に陥ったであろう姿が、データの的にも浮き彫りとなった。

但し、B表の記載欄には、別途、オンライン礼拝欄を設けるに留めており、厳密に各個教会伝道所が何らかのオンライン礼拝をささげた実数であるとは言い難い。礼拝者数の中に、オンラインによる礼拝参加者を加えて記入している教会伝道所もあれば、会堂に実際に集まった人数だけ記入している教会伝道所もある。統計の取り方の工夫も必要であったかもしれないが、各教会伝道所の礼拝に対する考え方の違いもあり、統計上、一概に同じようには扱えなかったことは否めない。

しかしながら、全体として、礼拝者数が、コロナ禍の影響を全面的に受けたことは、確かなことであろう。

### 3. 教会学校

主日礼拝以上に開催できなかった教会伝道所が多かったことが想像される。コロナ禍以前からの減少傾向に歯止めがかかっていないところに、新型コロナウイルス感染症が拍車をかけたという状況であろう。出席者の平均が、1万人を割ったことは深刻な事態であることには違いない。

### 4. 受洗者数

2016年度に千人割れとなり、一時危ぶまれた後、やや回復傾向にあった受洗者数も明らかに減少した。年間受洗者743人という数字は衝撃的である。原因としては、やはり、礼拝や集会の中止などによって、教会の主たる伝道活動が、一時的に機能不全に陥ったことによるものと思われる。求道者が与えられ難い状況になり、受洗希望者への積極的な導きも困難な状態にあったことは否めない。と同時に、洗礼式そのものを、コロナ禍の中で控えている教会伝道所も少なからずあったことも考えられる。オンラインを用いた礼拝や集会の限界が、如実に表れた結果であろうか。

### 5. 教会伝道所数

コロナ禍に関わらず、減少傾向は続いている。

### 6. 逝去者数

B表には記入欄が設けてあるが、逝去者数のみを個別に統計処理することはしていない。したがって、確かなことはいえないが、受洗者数が、逝去者に追いついていないのは間違いない。新型コロナウイルスが原因によって、逝去された人が、大幅に増加したという証拠はない。

### 7. 献金

収入においては、明らかに一つの傾向がみられる。2019年度と比較すると、礼拝献金は19億1144万3千円→16億912万4千円と減少、月定献金(維持献金)は53億4126万4千円→52億1337万1千円とほぼ横ばい、特別献金は28億4842万円→29億2880万1千円と増加している。経常収入全体としては、103億9941万円→100億5363万9千円と、前年度のマイナス4%にとどまった。礼拝献金の減少は明らかに会堂に集まれなかったことによる。

しかしそれを補う仕方で、月定(維持)献金の継続があり、格別、特別献金が多くささげられたことは特筆すべきことであろう。

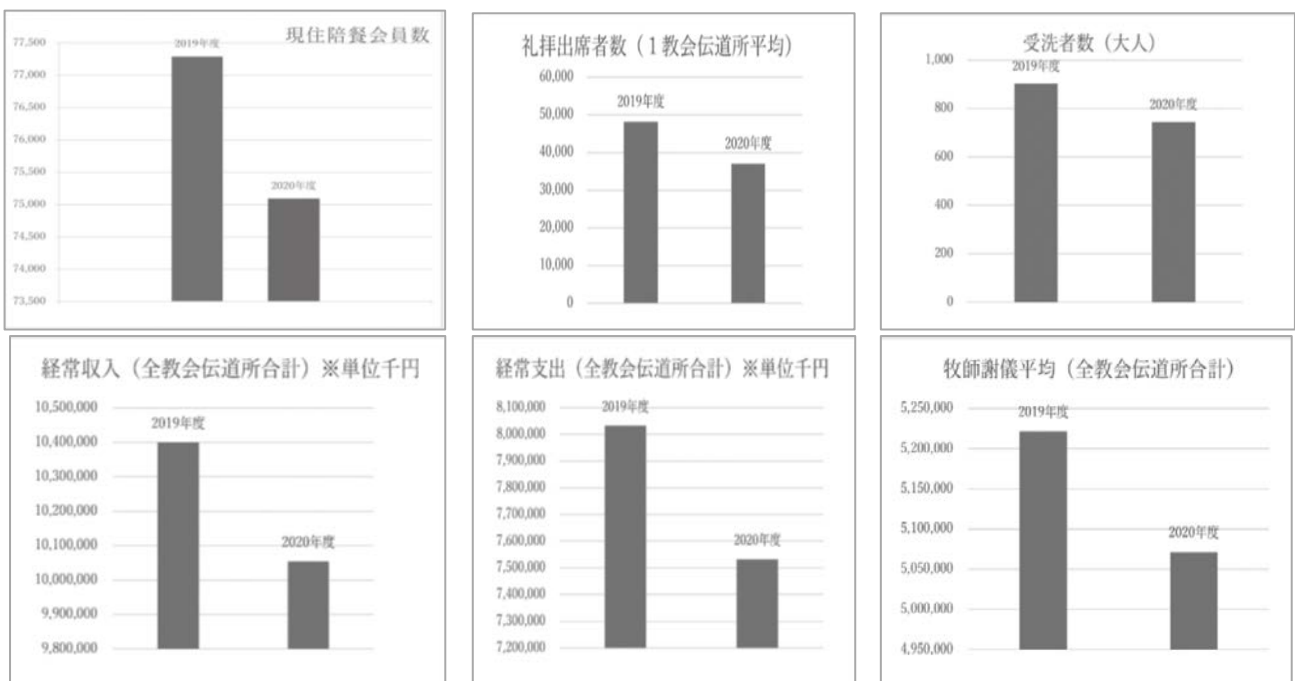
この傾向は、教会を自分たちが支えて行くという、他の宗教とは異なったキリスト教会独自の信徒一人ひとりのロイヤリティの高さをうかがい知ることができる。

支出の全体額も、80億3176万4千円→75億3238万6千円とマイナス4%にとどまった。但し、伝道費にかぎれば、4億4138万2千円→3億3199万円とマイナス25%である。これは明らかに、各個教会伝道所が伝道活動を展開できなかったことを表して余りある数字である。これに対して、牧師謝儀は、52億2168万1千円→50億7149万7千円とマイナス3%にとどまった。各個教会伝道所は、牧師を支えるために力を尽くしたことが分かる。しかしそれはまた、牧師を支えるだけで精一杯の状況に追い込まれていたとも考えられ、今後、深刻な事態を招くことも予想される。

## 8. 今後の課題

今回は、データを通して、可能な限り見えてきた教会伝道所の姿を雑駁であるが分析してみた。そこに見えてきたことは、コロナ禍により、教会伝道所にとり当然のことであった「集まる」という行動自体を抑制せざるを得なかったことによる影響である。顔と顔を合せて、賛美と祈りを神にささげるといふ命の礼拝が機能不全に陥った。それは教会の伝道活動を直撃した。礼拝者数の著しい減少、それに伴う受洗者の減少は、生き生きとした教会伝道所の日常を奪った。さらには、財政面を直撃した。1年半経たず、それらに代わるものとして、オンライン礼拝や集会の普及、さらには、オンライン献金などの“アプリ”が次々と開発されつつある。

しかし、その流れに追いついていない教会伝道所もあり、IT格差も生じている。オンラインによる礼拝行為自体を認めていない教会伝道所もある。様々な考え方がある中で、コロナ禍の下にある各個教会伝道所は、あるべき姿を求めて、祈り続けるしかない。



日本聖公会管区事務所だより 2022年1月25日 第372号

日本聖公会各教会 信徒・教役者のみなさま

「日本聖公会宣教協議会」開催延期(2023年11月)のお知らせ

+主の平和がありますように

2020年10月に開催されました日本聖公会第65(定期)総会において、「日本聖公会宣教協議会および実行委員会設置の件」(決議第17号)として、2022年11月4日~7日に清里での宣教協議会の開催を決議し、実行委員会で準備を進めてまいりました。各教区・教会・関連施設・各委員会のみなさまには、この10年の実りや様々なご意見に関するアンケートにご協力いただきありがとうございました。

開催予定日まで1年前を切り、本来ならば準備の進捗状況や協議会の概要をお知らせしなければならない時期を迎えておりますが、準備を始めてからこの1年間、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、実行委員のメンバーは対面での実行委員会を一度も開催できていない現状があり、来年の秋頃の感染状況も見通せない中で全国から140名が集まることが可能かどうかという懸念もあります。そこで、実行委員会としては、2023年に1年間の開催延期を提案し、主教会と常議員会で以下の通りご承認いただきました。

2012年の宣教協議会の提言で示された「2012年以降の宣教・牧会の収穫感謝」に加え、コロナ状況下における各教区・教会の苦労や取り組みの一つひとつ、そして2020年の総会決議によって始められた「宣教協働区・伝道教区制」の働きや教区間協働・再編の歩みも「収穫」として祝福したい。そのために2022・23年の準備の過程自体をプレ宣教協議会として位置づけ、日本聖公会の枝に連なる各教区・教会・関連施設・諸委員会毎の分科会を持ちながら、それぞれの経験や提案を拾い上げていくプロセスとし、それらを2023年の宣教協議会において、顔と顔を合わせて分かち合いたいと考えております。

●宣教協議会の延期後の日程

2023年11月10日(金)～13日(月)の3泊4日(清泉寮・山梨県清里)

※ 拡大実行委員会を2022年8月22日～23日に東京(各教区宣教担当者や管区諸委員)で開催し、カテゴリー別の分科会をオンラインで開催しながら準備を進める予定です。宣教協議会(140名規模)と拡大実行委員会(40名規模)の予算については、当初5年間の積み立てに延期分の1年の積み立てを加え、参加費等でまかなう予定です。

2021年12月15日

日本聖公会宣教協議会 実行委員長 主教 磯 晴久  
 首座主教 主教 武藤 謙一  
 管区事務所総主事 司祭 矢萩 新一

**日本バプテスト連盟「BAPTIST No.800」(2022.3)**

=宣教部・国内伝道室「教勢報告」より

「コロナを経験する『今』を通して」

2020年度の教勢報告の提出にご協力いただき感謝いたします。

	2020	2019	前年比
教会・伝道所数	318	319	-1
在籍会員	33,147	33,390	-243
現在会員	13,435	13,746	-311
受浸者	157	275	-118
礼拝	9,698	11,323	1,625
祈禱会	2,491	2,914	-423
百天者	185	222	-37
c S 出席	3,225	6,455	-3,230
経常献金(万円)	187,507	195,767	-8,260
献金総額	243,292	255,265	-11,973
協力伝道献金	9,750	13,600	-3,850
// 実績額	12,357	12,933	-576
世界祈禱献金	4,000	4,500	-500
// 実績額	2,990	3,415	-425

教勢報告の結果を見ますと、この10年間で、教会員数、礼拝、祈禱会、教会学校等の集会出席者数、バプテスマ数など緩やかな減少傾向にありましたが、2020年度は前年度比で大きな減少が見られました。特に礼拝出席者数は9698人と1980年以来40年ぶりに1万人を切りました。また、教会学校の出席人数、バプテスマの受浸者数なども前年比の減少幅が大きくなっています。これらは新型コロナウイルス感染症の影響が大きいといえるでしょう。

そして、この1年でインターネットを用いたりリモートでの礼拝が行われるようになったことは大きな出来事です。礼拝への連なり方が新しくなる中で、リモートでの出席者数をどのように把握するかは各個教会によって考え方や事情が異なります。それを尊重していますが、今後、記録という観点から教勢報告



の際、どのように報告いただくかは重要な検討課題です。

他方、礼拝出席が前年比15%減に対し、経常献金は5%減にとどまっており、教会・伝道所に連なる1人ひとりが教会を支えるために精一杯の捧げ物をされていることが伝わってきます。

新型コロナ感染症の影響を経験している「今」、2020年度の教勢報告を通して、これからの教会形成、伝道方策、そして各個教会の固有の状況理解など新しい課題が与えられていることを強く感じています。

(常務理事兼宣教部長 中田 義直)

## 日本同盟基督教団「世の光 No.854」(2021.11)

「2022年の春・4年ぶりの教団レベル開拓 佐賀開拓開始!」

伝道部長 三浦 陽子

宣教130周年記念宣言文で、私たちはこう宣言しました。「『犠牲を惜しまず、積極的な開拓伝道と堅実な教会形成による圏内宣教および「日本とアジアと世界」を視野に入れた国外宣教を推進して、地の果てまで福音を宣べ伝える』(教憲前文) わざに励み続け、今日に至っています」と。これまでの同盟基督教団の圏内・国外の宣教の有様を共に言い表し、これからもこの宣教の歩みの継続をする決意をしました。

生ける主に導かれて、2022年の春に4年ぶりの教団レベル開拓伝道として佐賀開拓を開始します。残るべくして残ったと言われる伝道困難地4県の1県です。それは、「信じたことのない方を、どのようにして呼び求めるのでしょうか。聞いたことのない方を、どのようにして信じるのでしょうか。宣べ伝える人がいなければ、どのようにして聞くのでしょうか。遣わされることがなければ、どのようにして宣べ伝えるのでしょうか」(ローマ10:14~15)との主の招きによるものです。皆さんと共にこのために祈り、献金を通して、一人でも多くの方が主イエスを救い主として信じ、宣べ伝えるものとされるために、キリストのからだなる教会を形成するために、神の国の前進のために、日本に福音を満たすために佐賀県で宣教します。

正直、今日の状況では積極的に新規開拓伝道をする理由は見当たらないと思われる方もあるかもしれませんが。しかし、私たちの神である主は、今おられ、昔おられ、やがて来られる方、全能者です。「わたしはアルファであり、オメガである」(ヨハネの黙示録1:8)と言われます。始めも終わりも、主はご支配くださいます。コロナ感染症の影響の中で、教会の歩みであっても伝道の歩みであっても、様々な課題を抱えながらこの秋を迎え、2021年も終わりに近づいています。立ち止まりたくないような、あきらめたくないようなこのような時ですが、だからこそ、伝道部では、今の状況の中でどうしたら全地に福音を満たす働きを推進できるかと、真剣に主に求め、祈りつつ新規開拓の準備を進めています。「人にはできないことが、神にはできる」(ルカ18:27)。このお方だけを見つめて。

ぜひ、佐賀開拓のためにお祈りください。国内宣教献金をお献げください。同盟基督教団のすべての教職、兄弟姉妹が毎月500円ずつ献げるならその必要は満たされます。また、佐賀の情報がある方は、伝道部までお知らせください。佐賀出身、佐賀県関係者が身近にいる、お知り合いが佐賀にいるなどの情報提供のご協力をお願いします。

(安中聖書教会牧師)



平和特集

「再臨信仰とパンデミック」

旗の台キリスト教会牧師 上中 栄

### 1. 「絵にならない」災害

およそ百年前に大流行した「スペイン風邪」は、日本だけで45万人以上が亡くなるという、コロナ禍と桁違いの被害だったにもかかわらず、忘れられたパンデミックと言われます。歴史人口学者の速水融は、スペイン風邪が流行しても街の景色は変わらなかったが、数年後の関東大震災では街の景色は一変した、スペイン風邪流行期の写真が少ないのは、それが絵にならなかったからだろうと言っています。

コロナ禍も同じで、震災や水害など、被災していない人でも実感できる災害と違い、多くの人々が接するのは殆どデータです。病気の怖さを実感しているのは、実際に感染した人と家族、医療従事者のなかでも限られた人たちです。すると、私たちがパンデミックを理解するために必要なのは、「想像力」ということになります。それは感染に対する不安や、デマに踊らされるような消極的なものではなく、理解し自分の行動を決めようという積極的思考です。

### 2. 忘れられた歴史

スペイン風邪が忘れられたのは、キリスト教史でも同じです。スペイン風邪の日本での流行は、1918年半ばから1920年です。ホーリネス史では1918年1月から「再臨運動」、翌年末から「大正8年のリバイバル」が起きました。時系列から見て、スペイン風邪は再臨運動の直接の動機ではありません。しかし、死の恐怖を実感した人々が、再臨運動やリバイバルの集会に参加していたことは確かです。

これらは特筆すべき出来事ですが、旧歴史編纂委員会が遺した書籍類にも、スペイン風邪についての言及はありません。実は他教派も同様で、研究会が急遽立ち上げられ、今日的な意味について調査が行われました。例年の平和特集と趣が異なりますが、その中から再臨運動について考えてみます。

### 3. 再臨運動の背景と契機

スペイン風邪の発生が確認されたのは第一次世界大戦中です。ロシア革命、大戦後のヴェルサイユ体制や国際連盟の創設など、世界中が平和を求めながらも、不安定だった時期です。特に、離散したユダヤ人が、パレスチナに国を樹立することを目指した「シオニズム運動」が、外交のかけ引き材料になるなど、現実味を帯びていました。国内は、いわゆる大正デモクラシーの時期です。第一次世界大戦の軍需景気から戦後不況に転落し、労働運動や普選運動などが盛んになっていました。

そうした中、再臨運動は内村鑑三の呼びかけで始まりました。中田重治や組合教会の木村清松が応じました。内村が再臨運動を始めた契機は、娘ルツ子の死、第一次世界大戦、友人ベルから送られた「The Sunday School Times」の再臨の記事の3つと言われます。特に、世界大戦という悲惨な事態を、キリスト教国アメリカが打開することを内村は期待していました。しかし、そのアメリカが参戦したことに深く失望し、究極の解決は再臨信仰だと確信するに至ったといえます。

これは単純な現実逃避ではなく内村の思索の結果ですが、主流諸教派の人々は、非科学的だと非難しました。

中田の場合、著名人内村の呼びかけに乗ったという側面もあり、もともと「四重の福音」という素朴な信仰の提唱は、主流諸教派から批判的に捉えられていました。しかし、中田も子どもを亡くした経験があり、聖霊の力を求めて渡米したのですから、観念的な再臨信仰だったわけではありません。

### 4. 再臨信仰の内容

ところで再臨信仰は、黙示録の「千年期」を比喩的に捉えるか、字義的に捉えるかで理解が分かれます。字義的に捉える場合、さらに千年期にキリストの支配によって世界は改善し、その後に再臨があるという「千年期後再臨説」と、千年期の前に再臨があるとする「千年期前再臨説」に分かれます。

このうち、聖書を7つの時期(ディスペンセーション)に分ける「千年期前再臨説」では、千年期はイスラエルの回復期だと理解します。当時のホーリネスの再臨信仰はこの立場です。そして、先の「シオニズム」が、再臨のリアリティを下支えたのでした。千年期説には批判的だった内村も、再臨運動の時期は、シオニズムと共にだいたい受け入れていました。そうした内村の世界情勢分析や批判は、説得力を持つことになりました。

## 5. 再臨運動のメッセージ

内村や中田が語った主なメッセージは、「警告」です。未曾有の大戦や社会不安の中で、「再臨が究極の解決である、終わりが近い、だから備えよ」というのです。興味深いことに、スペイン風邪の猛威の中でも、死の恐れに対する慰めや希望の要素は多くありません。「警告」はディスペンセーション主義の特徴ですが、それだけで毎回何百人もの人が集まったとは思えません。

内村も中田も、「デモクラシーにも社会主義にも救いはない、ただキリストである」と訴えました。当時の「デモクラシー」は、今日の民主主義と同じではなく、吉野作造の「民本主義」のように、天皇の主権を前提とした民衆本意というものでした。

つまり、今日の人権・主権と意味合いが違うなかで、再臨信仰を土台に人生の規範や目的を説いたことになります。内村も中田も、当時の天皇制から自由だったわけではありません。それでも彼らの言葉は、スペイン風邪で死の恐れの中にいた人々に響いたのです。

それとともに、こうした終末思想は、公権力からも注視されました。為政者にも別の意味で響いたわけです。再臨運動自体は、一年半ほどで終息します。内村は聖書研究に、中田らホーリネス教会はリバイバルへと別れますが、十五年戦争下、共に再臨信仰が治安維持法に抵触するとされたのでした。

再臨運動といえば、その信仰運動の活発さが評価されたり、逆に前近代的な要素が批判されたりしてきました。しかし、なぜ内村や中田の言葉には力があつたのか、彼らの社会や人を見る眼はどういうものだったのかなど、学ぶべきことは多いと思います。

## 6. 再臨信仰の今日の意味

今日、私たちの教団でもディスペンセーション主義の聖書釈義には批判的ですし、シオニズムを支持しているわけでもありません。コロナ禍で「再臨が近い、備えよ」と叫ぶ人もいません。

それでは、再臨信仰は私たちにどのような意味があるのでしょうか。「終末についての希望」が正解でしょうか、それが遠い未来の話としか、再臨についての無難な答えて終わらせないためには、今日の私たちの生き方を規定するものと理解しなければなりません。

まず、内村や中田の時代に比べると、現代は人間の尊厳や価値について、格段に語りやすい時代です。先月号に記したように、キリスト教的な価値観とも深く関係する民主社会だからです。創造主によって諸権利が与えられているという「天賦人権論」は、日本国憲法の人権理解に影響を与えています。

こうしたキリスト教的な価値観を、どれだけのキリスト者が大事にしているでしょうか。また、改憲論者たちが、キリスト教的な天賦人権論を削除しようとしていると、どれだけのキリスト者が気付いているでしょうか。

再臨運動のメッセージが当時の人々に響いたのは、内村らの社会状況の認識や批判が、浮世離れしていなかったからだと考えられます。今日、コロナ禍が過ぎるのをじっと待つのが、終末の希望に生きることでしょうか。コロナ禍で露呈している諸課題にどう向き合うのか、これも再臨信仰に基づく思考と言えるでしょう。

## 7. 再臨信仰の課題

再臨信仰の行き過ぎは、後のホーリネス教会に混乱をもたらしましたが、ここで着目したいのは、別の課題です。内村はスペイン風邪が流行しても、劇場や政治集会に多くの人々が集うことを批判しますが、再臨運動も毎回盛況でした。これは災害時に問題になる、自分は大丈夫と思う「正常化バイアス」と似ています。また、感染状況は大変だが、再臨運動は盛況で「大感謝」とも言っています。これは今であれば「不謹慎狩り」の標的になりそうな感覚です。さらに、リバイバル期のホーリネスでは、病氣と罪を直接結び付ける信仰理解や、苦しくても信仰的に気丈に振る舞う報告が散見されます。これらは、ディスペンセーション主義やリバイバルリズムの影響と言えますが、信仰と個人の心情や心身の健康とが、遊離していたことは否定できません。

パンデミック理解に必要なのは「想像力」と申しましたが、信仰がそれを妨げ得るということです。今日、キリスト者の多くは、自粛など良心的な行動をし、コロナ禍で苦闘する人の心に寄り添おうと思うでしょう。悪いことではありませんが、それ自体は「持ち前の感性」であって、「想像力」ではありません。

例えば、最近ある芸能人夫婦が死産を公表すると、何千もの励ましのコメントが寄せられました。美談のようですが、死産を経験した人は、そのコメントは「善意の暴力でいっぱい見ていられない」と言います。善意の言葉が、人を傷つけるというのです。以前、災害ボランティアは善意の押し売りになり得る、と言ったら随分批判されましたが、キリスト者は、被害者への同情は美德だと思ひやすいのでしょう。

ただ、究極の解決を知っているという自負は、思考停止を誘発しやすく、持ち前の感性の吟味は難儀です。信仰が現状と遊離しないためには、「想像力」はアグレッシブであるべきです。

## おわりに

最近、再臨信仰はあまり強調されません。再臨信仰で混乱した歴史がある、聖書釈義が難しい、非科学的要素があるなど、正しいけれども弱々しい言い訳を並べても、希望は生まれません。

今は、終末を見据えた上で自らの感性を磨き、思想を鍛える好機だ、というくらいの気概を持ち、「絵にならない」課題に向き合いたいものです。

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団「アッセンブリー News NO.793」(2021.10)

## 「WITH コロナ時代の国内伝道」

国内伝道部員 杉田キリスト教会 久保田 顕

### 賜物バンク

このコロナ禍の中で福音宣教には様々な課題がありますが、私たちは共に祈り、励まし合い、聖霊に満たされて宣教に励むことができます。国内伝道部は教会と教職の孤立を防ぎ、教区、教会、教職のネットワークをさらに充実させるため、宣教戦略室と連携しながら様々な活動を実施しています。特に今年度からスタートしている「賜物バンク“AG gift”～あなたのギフトを誰かのために～」のプロジェクトは、宣教戦略室の賜物バンクプロジェクトチームと共に、国内伝道部が宣教を前進させる一つのツールとして、全面的にお勧めしているものです。

この「賜物バンク」とは、AG 信徒の賜物と教会のニーズをマッチングさせ、“橋渡しの場”として教団信徒向け情報 サイト「AG Fellowship」内に設けたものです。具体的には個教会で推進したい伝道の働きや施設の充実などに対して、賜物のある信徒を派遣する制度のことで、このプロジェクトはいくつかの段階を踏んでおり、まず賜物が与えられている信徒が所属教会の牧師の推薦のもとに、審査を経て登録されます。個教会はその賜物バンク登録者リストの中から奉仕を依頼したい方を国内伝道部に依頼します。そして国内伝道部が個教会と賜物バンク登録者の調整をした後に人材を派遣することになります。

現在、この賜物バンクの登録者を幅広く募集しております。例えば賛美・伝道・パフォーマンス・設備アドバイザーやデザイン(詳細は賜物バンクポスターに記載)などです。さらに多くの賜物を持つ方々に応募・登録をいただき、日本の宣教の前進のために用いられることを願っております。

### 敷居を低く

一昨年、この賜物バンクを利用した教会の実例を紹介します。これは「災害復興イベント: Music and Arts Festival 2019」をテーマに、広島神愛キリスト教会で開催された集会です。ゲストにはプロのメイクアップアーティストである姜韓娜姉をお招きして、子育て世代の家族を応援し、若い世代を教会につなげるチャンスを作ることを目的として開催しました。このイベントには多くの子どもたちや若い世代の方々が参加し、普段では体験することができないプロのメイク術などを体験することができ、参加者は大変喜んでおりました。

このような機会を通して未信者の方が、“敷居が高い”と言われがちな教会に足を運び、聖書の話に耳を傾け、クリスチャンとの交わりの時間を持つことで伝道のチャンスが与えられていきます。

### マルチメディア伝道

またこのコロナ禍でマルチメディア伝道にも注目が集まりつつあります。これは文字・画像・動画・音声など様々な情報を組み合わせて統合した情報を、伝道に活かしていくというものです。一例ですが、杉田キリスト教会では「5分で分かる聖書の話」をテーマとして、5つの段階に分けた聖書紹介の動画をホームページに掲載しております。この目的は2つあります。一つ目は、自分で個人伝道をしたい方がスキルアップの学びとして視聴することです。二つ目は、伝道したいけれど、自分の口でするのは苦手という方が、この動画を伝道の場で用いるためです。この動画はホームビデオで撮影して、動画編集ソフト(有料もしくは無料ダウンロード版もある)を使うことで、動画の上下に「聖書のテーマ」や「実際に話をしている言葉」をテロップとして入力したり、BGMも付けて配信しております。その編集によって、視聴している方にも分かりやすく、しっかりと福音を伝えることができるようになります。



またマルチメディアによる伝道の効果を確認する方法として、動画を視聴された方がどのような感想や思いを抱いたのかを把握するために、google フォームでアンケートを動画の近くに作成することもできます。この方法はオンライン礼拝の動画を見た方にも適用できますので、牧師と信徒の情報共有にも役立つと思います。

重要なことは、このマルチメディアを使った伝道を一人の牧師が担おうとするのではなく、信徒も一緒に学び、積極的に参与することです。またこのような専門的な知識が必要な伝道でも、囲内伝道部がお勧めする「賜物バンク」を用いることが可能ですので、ぜひご活用ください。

## 今の時代だからこそ

このコロナ禍で救いを求める人がますます増えている今の時代だからこそ、教区や教会の枠を超えて信徒の賜物が用いられるとともに、メディアを活用した「WITH コロナ伝道」にも力を注いで、牧師と信徒が一丸となって宣教の前進を目指していきましょう。そして私達に与えられた賜物を活かして WITH コロナ時代だからこそできる様々な伝道方策を、積極的に取り入れて宣教を前進させていきましょう。

## ウェスレアン・ホーリネス教団「聖潮 356 号」(2022.1)

### 【特集・コロナ禍後の教会像を求める】

#### 「コロナ禍後が来る前に」

福岡エルシオン教会 木内 一夫

「私は確信しています。死も命も、--(新型コロナウイルス感染症を含む)他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すことはできないのです。」(ローマ 8:38, 39) ()内は筆者。

2021年11月下旬、日本では新型コロナウイルス感染症の感染者数は激減しています。さらに減少して「コロナ禍後」を迎えられたらとても嬉しいです。再拡大しても、希望をもちましょう。主イエスの復活の命は、コロナ禍でも必ず現わされるからです。

### (1)緊急事態での対応の検討

コロナ禍で必要なことは、教会関係者が感染した場合の対処についての検討です。感染者が①教会員、②集会に出席していた人にでた場合、どの様な対処をするのか。この検討はコロナだけでなく他の感染症に、さらには他の自然災害や事件に直面した場合にも広げ、緊急時でも教会の働きを続ける備えができます。

### (2)信仰の成長

コロナ禍でも、主イエスの力によって教会の信仰の歩みは、成長し、豊かになります。

### 献身

教会に集まっている時に奉仕していたことが、教会に行かなくとも継続できたらその献身は真実です。オンライン礼拝終了後に教会に駆けつけて奉仕をしてくださる方がいます。労力も時間も多くが必要なのにです。

献金も、集会時にはできていたことを継続する工夫が必要です。オンライン礼拝の開始前に「献金を入れる箱や封筒を用意してください」、席上献金の時に「用意したものに献金を入れてください」とアナウンスします。その献金を教会迄届ける方、振り込む方、牧師に取りに来てくださると頼む方など、忠実にお献げくださる方がいて感謝です。以前から礼拝のメッセージのCD等を受け取っていた方で、コロナ禍になってからはその発送のためにと指定献金を始めてくださった方がいました。

### 主にある交わり

コロナ禍における大きな問題は、交わりが絶たれたことです。当たり前前に礼拝堂でお会いして、会話をし、祈り合っていたことが難しくなりました。コロナ禍に入って、電話や手紙の回数が増えているならば、コロナに打ち勝って交わりが豊かになっていることでしょう。新しくオンラインでの交わりの方法や、それに馴染まない方への配慮などを考えることも重要です。

紀元 2 世紀頃ローマでは大変な疫病が流行っていました。1000 万人以上の死者が出て、ローマ皇帝もこの病気によって死んでしまうほど、恐ろしい疫病でした(『ローマ帝国衰亡史』より)。この時代に直面していたローマ帝国は、混乱の中で正しい政治を行えず、衰退の道を辿っていました。また当時はキリスト者迫害も行われていたので、ローマ帝国は怒りと憤り、悲しみと嘆きだけが残る暗い状況でした。そのとき、私たちの信仰の先達はどのように考え、どのように行動したのでしょうか。疫病が流行って道端に死体があり、家では孤独死が起こっている状況の中で、キリスト者たちは小さい共同体でありながらも死体を納め、孤独死をした人をお墓に入れ、病の人を助けました。自分たちも危険にさらされているにもかかわらず、キリスト者たちは死をも辞さず地の塩、世の光として生きていました。それが聖書の教えだったからです。教会には世の中で主からいただいた使命があります。「あなたがたは地の塩---世の光である」(マタイ 5:13, 14)。世が救われるために、世がよくなるために教会は存在し、共同体で礼拝し、主の恵みを福音をもって宣べ伝えているわけです。

浅草橋教会は、ローマのキリスト者のような働きはできません。しかし今コロナを少しずつ理解し把握して、今の時代の中で教会ができる塩と光の役割を探し求めています。今は少しでも多くの方々に主の福音を宣べ伝え、賛美を届け、祈りを分かち合うために、2 回に分散しての祈祷会、礼拝を献げています。そしてオンライン配信を通して信徒の霊性、信仰の成長、伝道の働きを果たしています。オンライン礼拝、オンライン伝道会、オルガン演奏のオンラインフレッシュタイム、オンラインメディカルカフェ、オンライン修養会、オンライン特別集会など、信徒にそして未信者にメッセージと賛美を届け、慰めと励まし、祝福と愛をオンラインを通して届けています。

今は前のように触れ合いをもつ家庭集会、伝道地の諸集会、病院訪問、家庭訪問はできませんが、Zoom、You Tube を通して、また手紙、ハガキ、メールなどを通して信徒の方々にメッセージを届け続けています。

しかしまだまだ手が届かない様々なところがあります。初代教会のキリスト者のように暗い時代、厳しい状況を迎えています。地の塩、世の光としてその使命を忘れず、主のために何ができるかを探し求め、祈りを深め、聖霊に満たされて、福音をもって今日を生きるウエスレアン・ホーリネス教会になることを切に願い祈ります。



## あとがき

厳しい寒さが続く中、新型コロナウイルスによる感染症の拡大も第6波を迎え、中々収束の出口が見えない日々が続きますが、皆様にはお変わりはないでしょうか。

2022年に入り、ここに「日本宣教ニュース第22号」をお届けすることができることを感謝致します。

今回号の巻頭言は、東京基督教大学国際宣教センター「2021年度冬学期教会教職特別セミナー」の講師として講演された八潮ホープフルチャーチ久島真人牧師にお願いして執筆していただきました。

久島牧師は、昨年3月に東京基督教大学大学院修士課程を卒業され、その後八潮ホープフルチャーチに赴任されました。「教会教職特別セミナー」では、修士論文で取り組まれたテーマの講演、及び「巻頭言」では、その実践版として「八潮ホープフルチャーチの理念」について分かち合っていました。

講演で述べられているように、コロナ禍によって立ち止まりを余儀なくされている「今」、個々の教会においては、「教会理念・牧会理念」によって教会としての本質を問い直し、教会形成の在り方、宣教の在り方を見直し、変革することが求められていると言えますが、しかしながら、コロナ禍によって顕在化した「時代の危機」は、一教会だけの力では太刀打ちできない大きな危機を孕んでいると言えるのではないかと思います。

前号の「巻頭言」では、日本同盟基督教団の2020年度の教勢及び献金額の減少、特に受洗者数が大幅に減少していることが紹介されていましたが、今回号では日本基督教団及びバプテスト連盟の教勢・財務報告で同じように礼拝者数や受洗者数、献金額の減少等、より詳しい報告がなされています。

このように現在、教団・教派を問わず、日本のキリスト教会全体が、コロナウイルスという目に見えない脅威によってその存続が脅かされていると言ってもよいのではないかと思います。

しかし、私たちが脅かすものは、コロナウイルスだけではありません。教皇フランシスコは、『パンデミック後の選択』で、「今は、無関心である時ではありません。世界中が苦しんでいて、パンデミックに立ち向かうために結束しなければならないからです」、そして「パンデミックからの遅々とした困難な回復を待っている今は、遅れて背後にいる人々を忘れる危険があります。より悪質なウイルス、無関心なエゴイズムというウイルスに侵されるかもしれない危険です。自分にとってよければ生活が改善しているという考え、自分にとってよければすべてよしという考えによって拡散されるウイルスです」と述べています。

今、日本のキリスト教会も、コロナ禍によって露わにされた以前からの体質的な課題も含めて、共通した危機的な課題に直面しています。このような「時代の危機」に、日本のキリスト教会はどのように立ち向かうのでしょうか。主にあるキリスト教会であれば、聖書が示す神の国の完成という共通したゴールを目指しているはずで、そのような共通した目標を目指す中で、共通した危機的な課題を共有しているのであればなおのこと、自教団・自教会だけでなく、遅れて背後にいる教団や教会も含め、教団・教派を超えた連帯、「ニューノーマル時代」に対応した宣教戦略等の共通した課題への取り組みが、「今」何よりも必要なのではないのでしょうか。  
(初穂)

## 献金者名 (2021年6月～2022年2月)

◎尊いご支援に、心から感謝申し上げます。(敬称略)

石井由紀、柴田美枝子、渋谷和之、島田治夫、中野覚、松原正幸、  
キリスト聖協団清瀬教会、センド国際宣教団、日本キリスト教連合会、  
日本キリスト合同教会、日本聖契キリスト教団、日本同盟基督教団、本郷台キリスト教会

## 感謝のご報告と継続支援のお願い

日本宣教リサーチ (JMR)は、今年4月で発足から8年目を迎えます。旧教会インフォメーションサービス (CIS)の支援者の継続的なご支援や、新たな支援者の方々のご支援をいただき活動が支えられて来ましたことを心より感謝いたします。

2022年も、「日本宣教ニュース」等の情報発信と共に、JCE7 (第7回日本伝道会議)向けの『データブック』の作成や、TCU 国際宣教センター「キリスト教葬制文化研究会」の一員として、全ての人に開かれた「キリスト教葬制文化の確立」等の働きに取り組んでいきます。

なお、昨年12月に新たに李宰碩 (イ・ジソク) 師 (日本同盟基督教団市川福音キリスト教会協力宣教師)が研究員として加わり、日本宣教リサーチの働きに協力していただけることになりました。

どうか引き続き JMR の働きにご期待くださり、更なるご支援を賜りますよう、よろしく願いいたします。

JMRの活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

(1) **特別賛助会員**:趣旨に賛同し、支援して下さる教団・教派、宣教団体等

- ・一口 30,000 円 (何口でも)
- ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
- ・毎年 2~4 回「日本宣教ニュース」のご提供
- ・毎年 1 回「JMR 調査レポート」のご提供

(2) **一般賛助会員**:日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等

- ・一口 2,000 円 (何口でも)
- ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
- ・毎年 2~4 回「日本宣教ニュース」のご提供
- ・毎年 1 回「JMR 調査レポート」のご提供

### 日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

東京基督教大学への寄付金 (献金)は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金 (献金)額の約 50%となります。

詳しくは、☎0476-46-1131 (TCI 募金係)までお尋ねください

郵便振替口座:00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

\* お振込みの際には、振替用紙に「**日本宣教リサーチ 指定**」と必ずご記入ください。  
(振替用紙がお手元がない場合はこちらよりお送りいたします)



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ

【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5

学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内  
TEL:0476-31-5522 FAX:0476-31-5521 E-mail:jmr@tci.ac.jp  
<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一 (東京基督教大学学長)  
日本宣教リサーチ研究員 柴田 初男、李 宰碩